



筑波大学附属図書館ボランティア広報紙

第22号

私の図書館発見 Part II

目次

私の図書館発見—乙竹文庫を読む	飯島倍雄 1
私の図書館発見	藤山通子 3
『人物叢書』との出会い	西内好子 4
私の図書館発見 — 「ウソ読みで引ける難読地名」との出会い	小関美保 5
私の図書館発見	矢部 健 6
私の図書館発見—鳥獣戯画について	山本聡子 7
私の図書館発見	大森久美子 7
私の図書館発見	森田 武 8

編集にあたって

筑波大学附属図書館ボランティアは、活動の一環として広報紙「うたがき」を発行しています。

ここ数年、大学の施設紹介や図書館の展示、地震と図書館などハードウェア的なテーマが多かったのですが、今回は少し内省的に、ボランティア個人と図書館とのかかわりをテーマにしてみました。つくばという土地柄か、他では見られないようなさまざまな人生経験を持った方々がボランティアの仲間におられます。多くの選択肢の中から図書館ボランティア活動をえらんだ動機の一部でも垣間見られたら、そして同時に、図書館にはこんな楽しみもあるのかと何か発見していただけたらと存じます。

今回も附属図書館ボランティア同士の意思疎通のために毎月発行している「図☆ボラの会」会報から転載、一部は新しく依頼して編集しました。

広報紙「うたがき」は第17号から筑波大学附属図書館のボランティアのページで公開されています。私たちボランティアの活動をより広くより多くの皆さんに知っていただければと願っています。筑波大学附属図書館ボランティアの活動に興味をもたれた方々のボランティアへの参加を歓迎します。

広報部員一同

私の図書館発見—乙竹文庫を読む

飯島倍雄

筑波大学附属図書館のボランティア活動での楽しみの一つは、珍しい資料にめぐりあえることである。

総合案内カウンターに座っていて、手のあいた時間を利用して、図書館 HP の中にある文庫・コレクションのデータベースを開くと、本学関係者が寄贈した蔵書・資料や図書館コレクションの資料を見ることができる。検索中、乙竹(おとたけ)文庫が目にとまる。「東京文理科大学教授乙竹岩造の旧蔵書 1457 点からなるコレクション。昭和 30 年(1955)受け入れ。」と見出しがつけられている。嬉しいことにこれらの資料は、大半が電子資料化されており、パソコン上でも手軽に読める。

さらに本文庫は、乙竹教授が主著『日本庶民教育史』の資料として収集したもので、往来物(注)を中心に女子用教科書や教育史関係資料が含まれている。乙竹教授(1875~1953年)は、明治から昭和にかけて活躍した教育学者、日本教育史学者。大正初年から日本教育史の研究を始め、前掲『日本庶民教育史』は昭和 4 年(1929)に出版され、全三巻からなる。全国規模で寺小屋教育体験者にアンケート調査し纏めたもので、学界から高い評価が与えられている。

(注) 鎌倉・室町時代から明治初期に至るまで、初等教育、特に寺子屋用に編集された教科書の総称。

「往来」とは、消息往来の意であるが、中世以降庶民教育の教科書となる。

私は、現在乙竹文庫を電子資料で読みながら、『日本庶民教育史』を併読している。資料は膨大で、資料全体を通読するのは難しいが、興味のあるところを拾い読みしている。

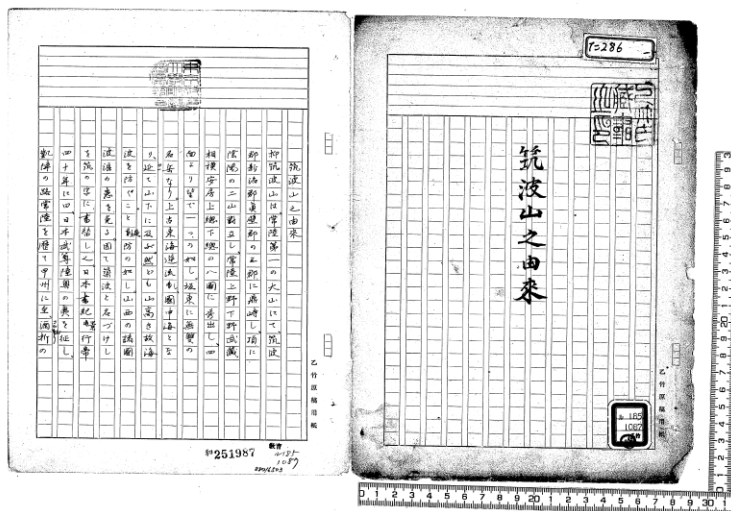
今まで読んだなかから、印象に残ったところを述べ感想としたい。

(1) 乙竹文庫の往来物について

一番印象に残るものでは、地元であることにもよるが、『筑波山之由来』である。この資料が寺子屋の教材として利用されたかは不明だが、出版されたのは文化十年(1813年)で、寺子屋の隆盛期にあたる。乙竹博士は、これを入手できず、所有者の許可を得て、手書きしている。こればかりでなく、いくつかの資料を手書きしており、研究のためには労を厭わない研究態度に頭が下がる。

「由来」の項は、読み本作家・高山蘭山が書いており、筑波山の地名の由来と和歌に縁の深い山であることなどが書かれている。また、「筑波詣」の項では、江戸から筑波

山までどのようなルートで旅をしていたか、その道すがらの名所旧跡や地名の説明もあり、



現在松戸市小金付近は牧場であったこともわかり興味深い。

(2) 『日本庶民教育史』について

本書の特色は、膨大な資料の収集と全国的規模で寺小屋教育体験者への大規模なアンケート調査により、庶民教育史をとりまとめたもので、10年以上調査研究した労作であることだ。

先ず、寺子屋の教科書である『往来物』の収集に多くの時間を費やし、資料が入手できない場合は、所有者の所に足を運び手書きで写しをとっていることに感心する。

次に、アンケート調査は、全国の師範学校の生徒が夏休みに帰省する際に、地方の古老で寺子屋体験者をさがし出し、大正3年から3年間をかけアンケート用紙を依頼記入してもらっている。東京と大阪では、著者自ら回答先の一部に聞き取り調査も行っている。また、その調査項目は多岐にわたり寺小屋の実態が都道府県ごとに詳細にわかるように設計され、統計表も載せられており大変参考になる。

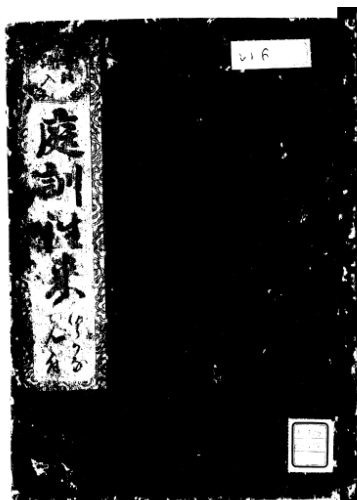
府県別には、関東地方と北海道・東北地方しかまだ読んでいないが、特に印象に残るのは、以下の事項である。

①四季を通じて授業が行われているが、午後になると欠席者が増える。特に、女子に多い。原因は、貧家の子は、家事を手伝い麻紡等の内職があり、豊かな家庭では、琴、三絃の稽古に出かけるためのようだ。

②入学金及び授業料は、金銭によるものが一番多いが、物納(入学金は赤飯、菓子、酒、授業料は米、品物、野菜一何れも多い順)も多く、個人の負担能力に応じており、師匠の生活が出来れば良いとの考えに基づくようだ。

③ 著者も述べているが、この庶民教育が続いてきたからこそ、明治の学制改革はスムーズに移行でき、就学率や質を高め得たのではないだろうか。

往来物は読み、書き、算術の教本が多いが、私は地理や実用に役立つ往来物を中心に読み進めたいと考えている。



私の図書館発見

藤山通子

小学生の頃から読書が好きで図書館が大好きでしたが、学生時代は試験勉強に場所を利用するだけになり、やがて図書館からは足が遠退いていました。

結婚し気分転換に幼い我が子をつくば市立中央図書館の絵本の読み聞かせに連れて行くようになり、再び図書館を訪れるようになりました。

その後渡米し、週末に自宅から往復1時間半のサンフランシスコ日本語補習校に子供が通うようになると、紀伊國屋や100円ショップも入っているジャパンセンターに程近い、サンフランシスコ公共図書館ウエスタンアディション館で時間を潰すようになりました。この小さな親しみやすい図書館は、土地柄か日本語書籍の蔵書が北カリフォルニア一多いのでした。紀伊國屋で和書を購入すると定価の2倍近くしましたので大変有り難いことでした。

一時期、補習校の図書委員を務めました。貸出、簡単な修理や新書購入など一通りの図書館業務が保護者ボランティアの図書委員に一任されていました。蔵書は全て児童書でしたが保護者も借りることが出来て、読書好きのお母さんの中で、上橋菜穂子の守り人シリーズは大人気でした！帰国に向け息子が受験のためサンマテオの学習塾に通うようになると、息子を待つ間サンマテオ図書館で過ごしました。街中の3階建ての新しい図書館で、個室もありパソコンも数多くありました。日本語書籍もそれなりに多く(約1000冊)、ソファもありオレンジページをパラパラ読んで過ごしたりもしました。

そして帰国してこのボランティアを始め、初めて電動書架を見ました！先日テレビで『図書館戦争』という映画を紹介していて、電動書架が映っていて思わず「あれ附属図書館にもあるんだよ！重たい本棚がボタンひとつで移動して、省スペースでスゴイんだよ～」と、私が威張ることではありませんが子供に自慢してしまいました。木曜日の図書修理もこれまで知らなかった本格的なもので(私は簡単な修理しか出来ませんが…)、ベテランの方々の素晴らしい職人技を、子供にも見せたいなあと感動しています。附属図書館のことはまだまだ知らないことばかりですが、いつか先輩ボランティアの皆さんのように附属図書館の達人になれたらなあと夢見ています。

『人物叢書』との出会い

西内好子

1年ほど前のこと、『シュシュンスイ』という人について書かれた本を探しているのですが。」と一人のご婦人がカウンターにいらした。「シュシュンスイ?」。聞いたことのない名前に一字一字漢字を尋ねたところ“朱舜水”と分かり、OPACで検索すると中2階にそれらしき本があることが分かったのでご案内した。吉川弘文館の人物叢書の並びにその本はすぐに見つかり、ご婦人は嬉しそうに本を手に取りお礼を言ってくださった。実はこの時私は初めて『人物叢書』なるものを知った。

それから2～3週間ほど経った頃、カウンターに一人のご婦人がいらして、また、「朱舜水という人について調べたいのですが…」と。今度は漢字も分かっていたのですぐに対応できた。しかし、短い間に二度も尋ねられたので、一緒に対応したNさんと、朱舜水ってどんな人なんだろうね、と話しながらインターネットで検索したところ、どうやら明の儒学者で水戸光圀と関係があるらしいということがわかった。なんとなくそれで得心した気分になって私の中ではそれきりになっていた。

それから数ヶ月後、話題になっていたので購入して読み始めた沖方丁の『光圀伝』の中で、再び“朱舜水”と巡り会ったのである。しかも、光圀に非常に大きな影響を与えた人物として描かれていたのである。もし、あの時の図書館での朱舜水との出会いがなければ「すごい人がいたんだなあ」で終わってしまい、そう言えば光圀は日本人で初めてラーメンを食べたという話を聞いたことがあるが（小説『光圀伝』の中にもそのくぐりが描かれている）やっぱりそれも朱舜水と関係があるんだろうな、と思う程度であったと思う。しかし、三度目の出会い。どうにも気になり、既に場所はわかっている中2階の人物叢書のコーナーに行き、そして、石原道博著の『朱舜水』を借りることにした。

“引用した史料は、すべて原漢文である。書きだしにして、わりあい多く本文にいれたが、意識したり、大意をとったりするよりも、かえって正確でわかりやすい、とかんがえた”という著者の方針のため確かに引用史料が多く、読むのにかなり難儀したし、読み解けないところもたくさんあったが、それでも朱舜水の人物像はそれなりに見えてきたように思う。私にとって“シュシュンスイ”だった人物が呼吸をしてそこに実在していたように感じられるようになった。

大袈裟かもしれないが、歴史は人の営みの結果のような気がして、そして、この「人物叢書」の中からその人物の息づかいが聞こえてくるような気がして、シリーズに収められている他の人物のものも読んでみたいと思ってしまった。難しいし、膨大であるのに…。

最後にもう一つ。光圀は朱舜水の祠堂を造った際に周りに桜を植えたのだが、それは、朱舜水が“サクラが好きで賞美してやまなかった”からであるそうだ。

私の図書館発見 ―「ウソ読みで引ける難読地名」との出会い

小関美保

小学生の頃から読書や辞書が好きで、退屈な時には国語辞典を引いて読書することもよくありました。何となく気になった言葉を引き、その周りにある別の言葉についての説明もついでに読み、さらに関連のある言葉が載っている別のページへ飛び…。辞書での読書を終えた頃には、引く前の予想よりも余分に賢くなったような気分になりました。

最近では、わからないことがある時はほぼインターネットで検索しておりますが、学生時代にお世話になった国語・英和・中国語などの各種辞典も時折引いております。

これまで辞書＝語学系というイメージでしたが、筑波大学附属図書館にボランティアとして通うようになってからは、そのイメージの幅が広がりました。

『20世紀思想辞典』、『世界ことわざ辞典』、『キリスト教辞典』、『女と男の日本語辞典』、『明治のことば辞典』……。これまで見たことも引いたこともない多種多様の辞典が、3階の一部だけでも山のようにあります。

中でも、個人的にとっても面白い！と思った辞典は『ウソ読みで引ける難読地名』（監修；篠崎晃一、編集；小学館辞典編集部）でした。この辞書は、難読地名を自己流の適当な読み方で引いても、巻末のウソ読み索引から引けば正しい読み方がすぐにわかる辞書です。

例えば、茨城県民にはおなじみの行方（なめがた）。山形県出身の私は「いくかた？ゆくえ？」などと読んでしまい、茨城県で生まれ育った知人友人に確認して初めて正しい読み方に辿り着きました。

が、この『ウソ読みで引ける難読地名』のウソ読み索引で「こうほう」「ゆくえ」から引くと、「なめがた」が載ったページに辿り着け、簡単な所在地までわかります。難読地名の正しい読み方は、人に尋ねるかインターネットで漢字を打ち込んで検索するかしかないと思っていたので、この辞書の存在は目から鱗でした。

また、「ああ、この難読地名はこういう読み方もしがちなのか。他県の人に説明する時に役立つかも」と、参考にもなります。そして調べる予定だった地名以外にも「そういえば、あの地名は何て読むのだろう。ついでに調べてみよう」と、ついついパラパラとあちこちページをめくってしまい、「へえ、こう読むんだ。勉強になった」と、知的好奇心をより満足させられます。

やはり辞書は、引く前の予想よりも余分に賢くなる気がします。また新たな辞書を発見し、紐解くのが楽しみです。

私の図書館発見

矢部 健

東日本大震災の年、2011年4月から筑波大学附属図書館ボランティアとして、総合案内及び利用環境整備の活動に参加している。広報誌「うたがき」の原稿として「私の図書館発見」という題で執筆を求められ、およそ60年を越える社会生活の中で、誰にも真実を明かしたことの無い側面を公開する羽目になってしまった。それは私がなぜいろいろな外国語に興味をもって、中途半端ながらそれらを習得し、実際に外国人とのコミュニケーションにも活用することができるのかということである。

話は私が17歳くらいの時代にさかのぼる。父が奉職していた某地方大学の小さな図書館があって、父のおかげで何の資格も学生の身分もない高校生の私が、図書館に自由に入りをするのを許されたのである。何の手続きもなしで書架のところへのフリーアクセス。一般の学生は検索カードで所要の本を検索し、図書館員の手を経て本をかりるのがルールであることを考えると、きわめて例外的な扱いであった。私はあまり気にもせず、蔵書の中から興味のあるものを自由に持ち出して読んでいたように記憶する。

ある日、ページを開くとローマ字で書かれているがさっぱり意味がわからない洋書に出会う。「何、これ？」とショックを受ける。すぐにこれは英語ではなくドイツ語の書籍であることがわかり、近くにあった「ドイツ語四週間」などの入門書とNHKのラジオ講座を併用してドイツ語を学習してみた。文法が英語より複雑で発音も特異的、新鮮な学びを体験した。つづいてフランス語、こちらにもまた異なった新鮮さがあったが、肌に合わないというか、すぐに学習をやめた。高校における英語の授業は、完全に無視していた。図書館の学術書などから幅広いボキャブラリーを習得し、テストはいつも満点近くをとるので先生も大目に見ていたようだ。

図書館で西和辞典なるものが目に入った。西がスペインを表すことを知らなかった。学習してみると、発音や文法ルールがドイツ語、フランス語に比べてずっと簡単ですっかり気に入ってしまい、途中何度も挫折しながらもやり続け、高校卒業のころは、手紙を書いて文通をするほどのレベルまで基礎を固めることができた。当時は、スペイン語など勉強する者は稀で、教材もその西和辞典一種類と、「スペイン語四週間」、NHKラジオテキストぐらいしかなかった。大学受験を前にして、この言語を使う仕事をしたいという強い思いがあったが、実現しなかった。大学は工学系の学科を履修したが、大学の先生はお前は語学に興味があるようだからと、外国へ行く可能性の高い職場である商社への就職を奨めてくれ、在勤中はインドネシア、イランなどの海外経験も積ませていただいた。

なぜ私がいろいろな外国語に興味をもって、中途半端ながらそれらを習得し、実際に外国人とのコミュニケーションにも活用することができるのかということの答えは、外国に対する好奇心であり、ただ言語を独習したことに尽きる。海外経験は極めて乏しく、今もって英語を話す国を訪問した経験もないのである。

高校時代の図書館体験のおかげで、外国語や外国に興味を持ちそのことが私のキャリアに少なからず影響を与えたということに今気づかせていただいた。

私の図書館発見—鳥獣戯画について

山本聡子

ずっと前から鳥獣戯画の図柄が気に入っている。平安・鎌倉期の作品で、動物たちの表情やしぐさがいきいきとした筆づかいで描かれている。ほぼ全編墨で描かれており華やかな感じはしないのに、一度その絵を見ると立ち止まり見入ってしまう。以前、シェルフリーディング中、日本絵巻大成6『鳥獣人物戯画』（中央公論社）をみつけた。絵はがきなどの断片的なカットしか見たことがなかったが、実際は絵巻物として横へ長く長く書き連ねられている。連続画面の作品で、現在は四巻が伝えられているようだ。詞書きがない

（別冊の詞書きがあったのか不明）ので絵を見て想像するしかないのだが、解説つきで読んでいくとより深く様子がわかる。例えば兎と蛙の相撲の場面を描いた絵はがき、気に入って飾っていたのだが、解説には

「兎が、もんどり打ってひっくり返っている。一方、蛙は目玉を剥いて仁王立ちのまま、激しい息遣い。取って投げてはみたものの、まだ不信顔。蛙の口から吐息の線を描いて、その虚脱感を表わしている。投げられてころぶ兎の腰の太い線が、ひときわ効果的で、宙を泳ぐ二つの足を、ぐっと支えている。喜んだのが蛙の相撲人たちである。やった、やったと雀躍するもの、天を仰いでバンザイを叫ぶもの、腹の皮がよじれんばかりに、地べたを這いながら、笑いの止まらぬもの。三匹三様の爆発的な喜びが、いきいきと描かれている。」

読んだ後と前では絵の印象さえ変わってくる。まるで動物たちの熱気が伝わり、歓声が聞こえてきそうである。

個人の持っている直感のような感覚的なものは大切だが、私は解説を読むことで、益々この絵が好きになり楽しく読み進めることができた。

分厚い全集を手にとり読むことで、長年好きだったものをより深く知ることができたのは、図書館ボランティアのおかげで、これからも積極的に図書館を活用していきたいと思う。

私の図書館発見

大森久美子

筑波大学附属図書館ボランティアでは活動の初期から、毎月おりがみ勉強会を開き、江戸時代から伝えられてきた伝承作品や、新作、ユニット折紙などを折っています。そしてこの勉強会で扱った作品から選んで、折紙講習会を年に数回中央図書館で行い、留学生はもちろん、日本人学生や一般の人にも折紙の楽しさを味わっていただいています。

何を折ろうかと考える時に参考にしているのは、2013年に創立40年をむかえた日本折紙協会が発行している雑誌『月刊おりがみ』です。以前、講習会で筑波大学所蔵の折紙の本を展示しようと「おりがみ」で検索してみると多くの検索結果があり、その中から『おりがみ、Vol.1 1974 春、Vol.2 1974 夏、Vol.3 1974 秋。』（754.9-071）が体芸図書館に

所蔵されていることを知りました。これは『月刊おりがみ』創刊時の3冊で、Vol.1には、伝承の兜やそれを発展させた新しい試みの兜が載っています。記事の中で、これまで伝承のひとつだろうと思っていた作品に作者の名前が書かれていて、それが個人の創作であったと知りました。また、“古典折り紙研究・千羽鶴今昔”と題され、江戸時代(1797年頃)に出版されたおりがみの本『千羽鶴折形』の中から「餌拾(えひろい)」についての記事がありました。「餌拾」は長方形の和紙に缺を入れ、大きな正方形と小さい正方形の接点を少しだけ切り離さず、それぞれの正方形で、つながった親鶴と子鶴を折るものです。少しだけの接点で親鶴のくちばしと子鶴のくちばしがつながった形に折れるのは、繊維の長い和紙だからできる事です。この原形から、子鶴の大きさを変えたり、子鶴の数を2羽3羽と増やしたり、親鶴を増やしたり、つながる場所をくちばしではないところにしたりというような発展形もみられます。先人たちのおりがみに対する研究心に感心させられました。

また、図情図書館所蔵の『原色図解紙工芸技法大事典』は、紙を折る・切る・張る・染めるなどの各種の紙工芸をとりあげており、おりがみについても数多く紹介しています。その他、折紙作品の本だけでなく、『オリガミクスによる数学授業』・『英語で折り紙』など興味深いものがたくさんありました。折り方を見ることのできるビデオもあります。図書館ボランティアをしていたからこそ出会えたこれらの本を楽しみ、その結果をまた講習会などに生かせられればと思います。



私の図書館発見

森田 武

私が、筑波大学附属図書館のボランティアを始めて、いつの間にか7年がたちました。動機は、ライフワークとして芭蕉に関する勉強をしたいと思い、ボランティア活動をしながらか生涯学習が可能で、住居にも近い図書館を選びました。

筑波大学には、芭蕉に関する書籍は、岡倉文庫の七部集や小文庫などの和装図書をはじ

めとし、五大紀行の復刻本や芭蕉全伝、江戸時代から現代に至るまでの芭蕉研究者の解説書等、大変豊富で約900冊あります。私の余生で、これら全てを読みきることは到底不可能です。

わけても、心に残るのは、日本中世史の研究者であり、戦前帝国史観の主唱者で国史学会をリードした東京帝大の平泉澄博士が、敗戦後、追われるように大学を辞して、郷里の平泉寺の白山神社に引き籠り、傷心の想いで著した『芭蕉の俳』です。

「摧殘の枯木、白山の寒林に倚つて、既に八年、瘦骨は風雨にさらされて愈々細く、鬢髪はいつしか霜を帯びて、鏡裏自ら驚くに至つた。此の間、満目の傷心、無限の恨事、言語に絶するうちに、わづかに心を慰むるもの、幸に古賢先哲の書の、戦災を免れて遺存するがあつた。しかも別して親しみ深く覺えたものは、實に芭蕉であつた。白雪、門を埋め、嚴寒、硯も凍る朝、しづかに之を讀めば、そぞろ古人が呼吸に接する感じがあり、明月、林に洩れ、空谷、寂として聲無き夕、ひとり之を誦すれば、ほとんど祖先の鼓動に觸るの想があつた。」(『芭蕉の俳』より)

平泉澄博士でも、無聊を慰め、余生の生き甲斐を「おくの細道」等に求めたとされる。

虚栗(みなしぐり)の私でも、「老いて学べは死して朽ちず」と云うから、今後も根気良く、この書籍の中から自分が求めんとするものを一筋に選び、気力と体力を保持しながら、芭蕉と付き合っていくことが出来れば幸せです。



図書館ボランティアについて

図書館ボランティア

筑波大学は開かれた大学として地域社会との融和を図っております。その努力の一つとして1995年6月1日には全国の国立大学に先駆けて図書館ボランティア制度を発足させています。

図書館ボランティアはつくば市およびその周辺に住む家庭の主婦、定年退職者などから選ばれており、現在約50名近くの図書館ボランティアが活動しています。いずれも生涯学習に大きな関心を持ち、ボランティア活動に熱心であり、豊かな人生経験と教養を備えた人々であります。図書館ボランティアはその活動を通じて、開かれた大学としてのイメージを高め、図書館サービスの向上に、地域社会との融和に貢献しております。

図書館ボランティアはおもに中央図書館で活動し、2階・4階ボランティアカウンターを定位置としております。

その主な活動は：

1) 図書館総合案内

館内窓口案内、資料配置案内、資料探索案内、端末機操作案内、各種申込記入案内、身体障害者や日本語に不慣れな外国人へ図書館利用支援。

2) 対面朗読

視覚障害者のための対面朗読、館内での資料探索支援。

3) 利用環境整備

中央図書館及び体育・芸術図書館各階の書架の整理、図書の修理、図書ラベルの貼り直し、など利用者が使いやすい環境を整える。

4) 体育・芸術関係資料の整理

美術展ポスターなどの整理。

5) その他

外国人のための日本文化紹介、留学生オリエンテーションの補助、図書館見学案内。

などです。

上記1) 図書館総合案内および3) 利用環境整備のため、図書館ボランティアは毎週、月～金の5日間、午前のシフト(10時～13時)、午後のシフト(13時～16時)に分かれて活動しています。

視覚障害のある方には上記2) 対面朗読など、訓練されたボランティアによる支援を行っています(予約が必要)。

留学生の皆さん、図書館を利用されるにあたって、わからないことがあれば、ご遠慮なく図書館ボランティアに相談してください。

図書館ボランティアは喜んでお手伝いします。

May, 2006

ON THE LIBRARY VOLUNTEERS

Prepared by Volunteer

The University of Tsukuba has been maintaining its policy to be friendly to the public, and maintain good relationship with the local community. As one of its efforts toward that objective, the University took a lead to adopt a library volunteer system. The system was started on the first of June 1995, which was said to be the first one among the national universities in Japan.

The number of library volunteers is nearly 50 persons. The system is mainly organized with housewives and retired persons who are living in Tsukuba City and its vicinity. They are having a continued interest on life-long learning, and are well experienced in their lives with good common sense.

It is believed that efforts of these volunteers have contributed for maintaining friendly images of the University and good relationship with local community. Furthermore it brought a lot of improved services of the Library as well.

The library volunteers are generally stationed on the 2nd and 4th floor of the Central Library of the University. Their major missions are:

1) General Information Service on the Library:

on general information, on document layout information, assist document search, assist PC-terminal operation, assist filling out various application forms, assist handicapped persons and foreign visitors

2) Assist Sight -handicapped Persons:

assist document retrieval and readout these for them

3) Maintain Library Environment (Shelf Reading):

check arrangement of books on shelves and their "call number tags" (light maintenance work on books to keep the library environment friendly to users)

4) Restore Materials in the Arts and Physical Education Library:

5) Others:

introduce Japanese cultures to foreigners, assist library orientations for foreign students, library tour guide

On weekdays, from Monday through Friday, the service of volunteers is done in two shifts, that is, morning shift (10:00 to 13:00) and afternoon shift (13:00 to 16:00).

For sight-handicapped persons, services by specially trained volunteers for the above item 2 is available when requested. (Reservation is needed.)

Whenever any question comes out in your mind, please feel free to contact volunteers at the Volunteer Counter on the 2nd and 4th floor. They are willing to help you.

うたがき

筑波大学附属図書館ボランティア広報紙

第22号

私の図書館発見

平成26年3月発行

編集：筑波大学附属図書館ボランティア広報部

発行：筑波大学附属図書館

〒305-8577

茨城県つくば市天王台1-1-1

TEL:029-853-2348 (情報管理課)